

J. A. コメニウス著『Linguarum Methodus Novissima  
(最新言語教授法)』に関する一考察A Study of *Linguarum Methodus Novissima* by J.A. Comenius (Komenský)

松岡 弘

## 要旨

本論文は、J. A. コメニウスの著した『*Linguarum Methodus Novissima*(最新言語教授法)』を考察の対象とする。本書はコメニウスの主著『*Didactica Magna* (大教授学)』が、ラテン語原文の各国語版への翻訳版を含め、広く普及していったのに対して、それよりも前に刊行され、かつ分量もそれを凌駕する大著であったにもかかわらず、これまで本書全体が考察の対象となることが皆無に近かった。その原因の一つが、翻訳版を欠くため全体の内容が知られていないという認識のもと、エルンスト・リーゼ (Ernst Liese) 著ドイツ語抄訳の主たる部分を訳出し、本書の概要を伝え、その意義を検討した。本論文はこれまで本紀要で考察してきたコメニウスの言語教科書『前庭』*Vestibulum*(第一学年用)、『扉』*Janua*(第二学年用)、『広間』*Atrium*(第三学年用)とも密接に関連し、これらの教科書作成を含めたコメニウスの言語教育の構想と実践を、日本語教育実践者の目から評価・考察した。

キーワード：コメニウス、最新言語教授法、エルンスト・リーゼ、言語教育、日本語教育

## 0 はじめに

本論文は J. A. コメニウス (1592–1670) が 17 世紀半ばにポーランドのレシュノで刊行した『*Linguarum*(言語の) *Methodus*(方法) *Novissima*(最新の)』の内容を紹介するものである。

断るまでもないが、「最新の」と言っても当時の「最新」であって、今から 370 年も前に書かれたものが、今「最新」なはずはない。それに和文訳タイトルで使った「教授法」も、山口喜一郎の名著『日本語教授法原論』(昭和 18 年 7 月刊行)まで遡らずとも、比較的長く用いられてきた用語だが、今は古めかしい。

そうした中、17 世紀に書かれた古い『最新言語教授法』を紹介することの主たる目的は、その内容を可能な範囲で提示し、言語教育史及びコメニウス研究史上の意義を知ることであるが、同時に、実際に言語教育に携わる者にとって、その方法が歴史の中でいかに変容し、そして発展し続けるにしても、教育方法の基本的な根っこの部分と教師の役割といったものは昔も今も変わらず、「古い」ものの中に「最新」がある、そのことを『最新言語教授法』を通して確認する、それが本稿の第二の目的であることを述べておこう。

## 1 『最新言語教授法』とは

数多あるコメニウスの著作物の中で(250に及ぶ<sup>1)</sup>、分量においても際立っている主著の一つが *Methodus Linguarum Novissima*(1649年初版)である。(以下、これを本書、ないしは『最新』と略称する。)本書のラテン語書名を直訳すれば「言語の最新の方法」となり、多くの文献目録等ではそう訳されているが、「言語の方法」では意味不明なので内容に即したものとした。本学の故鈴木秀勇先生は適切に「言語の最新の教授方法」とされている<sup>2)</sup>。

本書は、コメニウス存命中にオランダで編集刊行された *Opera Didactica Omnia*『大教授学全集』(1657年)の第2巻に収められ、第1巻におさめられた『大教授学』とともに比較的容易にその内容に接することができる。筆者の利用するのは1911年にチェコで刊行された *Veškeré Spisy Jana Amosa Komenského*『コメニウス全集』中の第6巻であるが、『最新』はその後半部336頁を占め、同全集中の『大教授学』の230頁を凌ぐ大著である。

ところが、この『最新』については、20世紀後半から今世紀にかけてコメニウス研究の双璧と目されてきた二人、故チャプコヴァ先生も故シャラー先生も、「全体の重要性が無視されている」<sup>3)</sup>、『大教授学』の陰の存在<sup>4)</sup>と述べておられるように、チェコやドイツの専門家の間においてさき取り上げられることが少なかった。ただ、10章だけは例外で、19世紀以来『分析的教授学』の名の下にチェコ語、ドイツ語、英語訳が出版、そして日本語(故藤田輝夫先生による私家版)にも翻訳されてきた。筆者は、既発表の論稿で何度か本書の内容に言及してきたが、それは10章に限るか、またはその他の部分のきわめて断片な引用に止まっていた。こうした状況が続いたのは本書の文章の特異性も大きいだろうが(後述のリーゼは、専門家向きで一般向きでない、冗長といった評を下している)、それ以上に、特にヨーロッパ以外の外国人研究者にとって取り組みにくい原因の一つは、ラテン語原著からのドイツ語あるいは英語への翻訳版が存在しなかったため、ともいえるだろう。なお、本書全体の翻訳版はチェコ語にはあり、また、つとに『最新』の重要性を強調してきたカナダのカラヴォラス教授(Jean Caravolas)監修によるフランス語訳<sup>5)</sup>も刊行されている(故コルトハーゼ先生の文献リストに『最新』のロシア語訳1982、ドイツ語訳1959との記載があるが、未確認)。いずれにしても筆者自身、辞書と文法書だけを頼りにラテン語文を迅速に正確に理解するレベルにはないし、フランス語は学んだことがなく、チェコ語の学習は初心者域を出ない。

もし、本書の要点と大まかな内容を知りたいだけならば、古くは例えばクヴァチェラ、さらにはチャプコヴァ先生の論稿<sup>6)</sup>の中に全体が的確にまとめられている。一方、日本にお

<sup>1</sup> Schaller(2004),p.13、Korthaase(2000)には138の書名論文名が記載されている。

<sup>2</sup> 鈴木秀勇(1960),p.167、(以下、面識があり教示を受けた方々には敬称を付している。)

<sup>3</sup> Čapková(2007),p.23

<sup>4</sup> Schaller(2004),p.24

<sup>5</sup> *La toute nouvelle méthode des langues, Jan Amos Comenius* (2005)

<sup>6</sup> Kvačala(1914),pp.61-66. Čapková(2007),pp.23-24

けるコメニウス研究の推進者の一人であった故堀内守教授の主著『コメニウス研究』には「言語の最新の方法」という独立の章がたてられているものの、『最新』の10章中心の大まか過ぎる概観<sup>7</sup>であり、そこから最新の具体的な内容と価値を知ることはできない。

## 2 エルンスト・リーゼ著『J.A.コメニウスの「最新言語教授法」』

こうした現状をかんがみ、一応ドイツ語は学生時代に専門としてきた筆者が本稿で採用するのは、1904年に刊行されたエルンスト・リーゼ(Ernst Liese)著 *Die neueste Sprachmethode des J.A. Comenius* 『J.A.コメニウスの「最新言語教授法」』の主要部を取り出し翻訳し、その作業を通して『最新』の中に込められたコメニウスの言語教育観とその手法を伝えることである。リーゼのこの本は、100年以上も前に刊行されたものだが、インターネット検索によると最近復刊されさらには英語訳版もあるようだから、その価値は改めて認められているのであろう。総頁数101頁の小冊子で、著者に関する詳しいことは分からない。前半の序論に続き、第1部として50頁にわたり『最新』全30章の要約が記されている。後半35頁(全体の3分の1)は著者リーゼによる分析・評価・講評である。(この部分は今回の考察には含めない。)

筆者は、リーゼが自著において行なった『最新』の抄訳部分を、各章ごとに紙数の許す限りできるだけ多く訳出する形で作業をすすめる。その際、リーゼが欄外に記載したラテン語原文も参考にし、さらに加えて、1978年にスイス・コンスタンツにおいて刊行された『最新』と書名を同じくする研究報告書を参考にした。この主たる部分は『教授学全集』からの『最新』のラテン語原文の転載であるが、その冒頭の解説で編者の一人ハルトマンは、『最新』はたった一度、75年前にリーゼにより個別研究として(monographisch)取りあげられた<sup>8</sup>と記し、同報告書では新たに『最新』各章の見出し文と各節の欄外小見出し文のドイツ語訳だけをまとめて掲載した。筆者はこれを参考にして、リーゼの要約・引用部分と原著の該当する部分とを照合し、さらにはリーゼには取り上げられていないが興味深く思われた部分を拾い上げ、ラテン語原文から訳出した。従って以下の記述内容は、リーゼ抄訳ドイツ語文の重訳というだけではなく、筆者の拙い読解力と判断をへた訳業であることを断っておく。

## 3 『最新言語教授法』各章の内容

全30章をすべて紹介する予定で作業を始めていたが、紙数制限もあり、11章から18章までを重点的に考察の対象とし、1章から10章までは要点内容を限定し、19章から28章は18章の末尾にその内容が箇条書にされているので、各章のキーワードだけを記すことにした。

---

<sup>7</sup> 堀内守(1970),pp.127-133

<sup>8</sup> Hartman u.Káňa(1978),p.8

第1章では、章の見出し文に「人間の言語(lingua)は精神(mens)と手(manus)とともに神の知恵の道具(divinae sapientiae organa)であるが、それは人の監督(cura)と陶冶(cultura)にゆだねられたもの」とある。これに続いて、「人には理性(ratio)と言葉(oratio)と行動(operatio)が神から与えられているが、これらは幼少期から陶冶によって獲得され、実践される」と述べられる。このように、コメニウスは言語を神の賜物とし、『最新』の冒頭から最終章に至るまで、随所に神と結びつけられた記述がなされる。これは非キリスト者にはやや違和感があるが、コメニウスの生きた17世紀の世界観・宇宙観は「人間観・自然観をも含めて、西洋の中世という長い時代を経て練り上げられてきた世界観で、紀元前からのギリシャ思想と、紀元後のキリスト教思想とが渾然一体に結びついて出来上がったもの」「キリスト教的であると同時に、アリストテレス＝プトレマイオス的な宇宙であり、自然界の真理を表わすものであると同時に宗教的真理を象徴する宇宙」<sup>9</sup>であったから、『最新』が特定の宗教の教義を特に表明していると捉えることはない、筆者は考える。

第2章では、言語(lingua)とは何かが定義され、その内容が述べられる。言語は談話(sermo)のために用いられ、事物(res)を示し、それを精神(mens)に引き渡す、そして理性(ratio)によって結合する確実な道具(apparatus)だ。談話は事物の模写(picta rerum imago)であり、その場にはないものを語り人々の間で語られる生活に必要なもので、事物について考察するときの基本であり、事物と思考(cogitatio)を前提とする。巨大な言語装置(linguae apparatus praegrandus)には、完全な事物名称リスト(nomenclatura)、詳しい意味記述のある辞書(lexica accurata)、語の結合を示す詳細な文法規則集(grammaricae praecepta exquisita)を備える。また、ことばは外的記号、身振り、音声、文字によって示されるとし、特に文字は神の素晴らしい贈り物で、容易なこと、迅速なこと、完全な点で優位にあり、最たるものが印刷文字で、速く、美しく、正しく書くことを統合している。

なお、コメニウスは文字についても詳細に論じ、そこには中国語への言及もあるが、J. Reberの注によれば、ベーコン(Bacon)に依拠とある。

第3章では、諸言語の多様性、起源、拡散が述べられる。人間の理性的判断、行動、言語は混乱状態にあり、混乱はバビロニアから生じた。元々は父祖の言語へブライ語のみが話されていて、アジア・アフリカの諸語もこれに由来する。言語の多様性から、自然言語(lingua naturalis)が存在しないことが証明される。もし言語が自然に与えられるならば、それは肉体と同じく民族による相違はないはずだから。だが、自然言語はなくとも、それに近い響き、構造、名称の存在は否定できない。

第4章では、諸言語の共通性と相違性が音声、語彙、語種、人称、名詞の格、動詞の時制、慣用句、方言について述べられ、諸言語間の優劣が比較され(ヨーロッパ諸語、アラビア語、トルコ語、モンゴル語、アステカ語)、コメニウスはへブライ語、ギリシャ語、ラテ

<sup>9</sup> 渡辺正雄「宗教時代の科学：1 中世西洋の宗教と宇宙」『歴史のなかの宗教と科学』(1993)より(pp.181-191)

ン語に優位性を認める。それは、これらの言語が古く (*antiquitas*)、神の知恵 (*sapientiae divinae*) であり、その他の言語に多彩に利用される人智の宝庫 (*humanae thesaurus*) だから。だが、全ての言語は有益である。すべて、神の知恵の道具なのだから。

第5章は11章から17章にかけて述べられることの先取り要約といったもので、リーゼもほぼ省略しているの、それに従う。

第6章では、複数の言語を学ぶことが言語研究、言葉の混乱の認識、人との交流、そして一般的教養の観点から推奨されるが、それよりもまず一つの言語に専念することが述べられる。その理由は、1. 言語学習の仲間が多い (*plures discendae, Mitarbeiter [ド]*<sup>10</sup>) ほど言語の習得が完全になる。2. 一言語が完全であるほど、それは他の言語の洗練化 (*Verfeinerung [ド]*) にも役立つ。3. それが使用されればされるほど、全民族を結ぶ帯となり、一種の世界語 (*lingua aliqua universalis, eine Weltsprache [ド]*) となる。これに最も適しているとヴィーヴェス (*Vives*) が推薦するのはラテン語で、既に多数の民族間の案内役をしている (*gentium multarum agat Mercurium*)。ラテン語の練り上げられた叡智の宝庫は人間の能力 (*ingenium*) に大きな影響を及ぼすが、そのことがわからない人はラテン語の難しさが使用される教授法によって生じる (*Tota culpa necessario in methodus recidit*) ことを見落としている。ラテン語の勉強で応用されてきた教授法の欠点は何か。どうやって全ての言語に応用できる教授法を作るか。

第7章では、これまでの言語教育、特にラテン語教授と学習法の様々な欠点が述べられる。ラテン語は日常語ではないから本を通して学ぶが、それには準備された補助教材 (*ab arte peterentur auxilia*) が必要であり、それには語彙名称リストと辞書と文法が用いられる。だが、そこにはルビヌス (*Lubinus*) やフォシウス (*Vossius*) が嘆くように重大な誤りがある。①母語にも欠けている事物の知識がないまま (*sine praevia rerum cognitione*) 外国語で教えている、②ラテン語で書かれた文法書で教えている、③段階を踏まず、不可能な飛躍 (*non gradatim ire, sed impossibiles saltus*) を強いている、の三点である。文法段階からキケロ (*Cicero*) やウェリギリウス (*Virgilius*) の文章が続くが、これらは言語と内容の上でも大人向きで子供には耐え難い。彼らの柔らかい頭を不要な重荷で苦しめ、時間つぶしに努めさせることはやめよう。もしキケロが今起き上がって、教室で子供たちが彼の文章に口ごもり苦しめられるのを見たらきっと腹を立てるだろう。

第8章では、この時までラテン語教授法の改善のために行われてきた様々な対応策が述べられる。メランヒトン (*Melanchton*) は過度に文法を重視し、ルビヌスやカセリウス (*Casellius*) は文法を無視するか、軽視する。ルビヌスが単語や文に合わせて事物の絵を載せる本 (*liber, in quo rerum omnium depictae sint imagines cum adiectis sentiis brevissimis tot, totius linguae verba et phrases exhausta*) を提案しているのはよい

---

<sup>10</sup> リーゼより引用したドイツ語の語句については、[ド]とした。

ことだが、文学作品を読ませるというカセリウスの提案は疑問だ。ラテキウス(Raticius、ドイツ語名ラトケ)の、教師が全てをし、生徒はすることがないというのは重大な誤りだ。その他、ホーグリウス(Vogelius)のラテン語による日記(Ephemeriden des Vogelius)、ザイデリウス(Seidelius)の『ラテン語の門』(Portula Latinae linguae)、アイルランド人神父による『言語の扉』について述べられ、コメニウス自身の著作物『扉』Janua と『前庭』Vestibulum、そして今後書かれる予定の『宮殿』Palatium(後の『広間』Atrium、筆者注)についてその編集理由と世間の評価が、コルヴィニウス(Corvinus)からは辞書の必要性、スキオピウス(Scioppius)からは新しい文法と作家の読み物への提案があったことが述べられる。

**第9章**では、「最新言語教授法」とは何か、なぜ手段を尽くしてそれを求めるのか、最後にそれが得られる期待と、それへの称賛があるのはなぜか、が述べられる。「最新言語教授法」の名称に相応しいものは、短く簡潔で、誤りがなく、一般的でありながら全ての知識と技術に適用され、子供がラテン語あるいは他の言語と事物を同時に理解し、発話し、そして教えるものである。教授学の根本は自然であり(Didactica naturae opus est)、それは教材と学習者のための一定の規則からなる技術に支えられる(Arte tamen iuvandum)

以上、**1章**から**9章**まで、原著では平均10頁、章によっては16頁に亘るような内容を主にリーゼの抄訳に頼って紹介した。これにより、『最新』に至るまでのコメニウスの言語観と当時の言語教育事情、その基本理念・方法が示されたと考える。キリスト教の神を背にラテン語を最高の言語とみなすコメニウスをどう理解するかは、それぞれに委ねられた部分であろうが。続いてコメニウスは自身が実行した言語教育を具体的に述べるが、その前に**第10章**が置かれている。

**第10章**は、すでに述べたように、「教授技術」(ars didactica)として、後世に「分析的教授学」と名付けられ、本体の『最新言語教授法』から切り離されて流布することになった部分である。この10章は英語訳とドイツ語訳が出版されており(チョコ語訳も複数ある)、故藤田輝夫先生の日本語訳(私家版)も存在するので、ここでは省略に付す。

**第11章**では、教授学の基礎の上に構築された言語教授法が、長期に亘る言語学習の範囲・間隔(intervallum)・程度(gradus)に応じて吟味される。言語教育の目標は全ての観念(mentis conceptum)を表現できること、純粹であること、すなわち俗語(barbarismus)、誤用(soloecismus)、外来語(peregrinus)等で談話の形が汚されていないこと、最後に書く際も話す際も辞書や文法書に頼ることがなく迅速に対処できることであり、言語の授業は段階を追って進むべきであり、まず始めにその言語の全基礎を習い(ediscere)、次にその言語の全ての構造(fabrica, structura)を習得し(perdiscere)、最後にその言語の精髓(robur)と優美(ornamentum)を学ぶ(addiscere)のである。

**第12章**では、授業に使われる道具が述べられる。それはテキスト、辞書、文法の三つであり、これらは互いを支え合う教材であるが、主要なものはテキストで、辞書と文法はそ

れに従属する。よってまず必要なのは事物を司る著作物であり、その理解のために辞書が欠かせない。テキストは短く、明晰に書かれていなくてはならないし、その勉強には文法も必要だが、文法も辞書も理解と暗記のための従者であって主人ではない。だが、著作物から始まるという主張と要求に子供たちは躓き、著者を理解しないのが現実である。ここに『最新言語教授法』の意味がある。即ち、巧みに編纂された準備教材を通して、確実に、短期間に、そして楽しく作者に近づく道(in autores via certa, brevis et amoena recludator)が示されるのである。それでは何種類の準備教材が必要か。第一はその言葉の基礎となるもの、第二は全体を構築するもの、第三はそれに力と美を付与するもので、その名称は、1「前庭」Vestibulum、2「扉」Janua、3「広間」Atriumで、『前庭』は骨格、『扉』は肉体、『広間』は色彩である。それぞれにテキスト、辞書、文法が編集される。テキストには挿絵や対訳、文法には例文が備わり、母語との特徴的な違いが考慮され、辞書にはラテン語ー母語、母語ーラテン語の二種が用意されるべきである。

**第13章**で論じられるのは、授業の進め方と成功への助言である。これは**10章**で詳述された一般原則の言語教育への応用である。まず優れた教師、学生数(より多く許可する)、同時に開始する、個別でなく一緒に教える、学生の好奇心(avitas)を誘う、教具(instrumenta)を通して教える、学生の教材に印刷ミスがあってはならない、教材以外の本は家でも当分は認めない、それは授業中の気晴らしにも使わない、常にテキストから始め、文法で終わる。本が多すぎると精神を乱すから。授業では精神(mens)、手(manus)、言語(lingua)が同時に陶冶されるべき(formanda)。すべてのことが説明され、書かれ、朗読され、毎日、毎時間行われる。生徒は全て自分で行ない(agant)、教師は導く(dirigant)だけだ。ただ、こうした練習は事前に生徒に示され、目の前で演じられる。そして生徒の自主性を養うため、聞くこと、見ること、読むこと、書くこと、辞書に親しみ、たくさん語り、質問し、答えることに注意を向けさせる。最初は急いではない。ゆっくりと non multa, sed multum(多数でなく多量。プリニウス(Plinius)の手紙にある。筆者注)。教師はいかにして生徒の知識への感性(sensus)を注意深く保たせ、継続させるべきかを知るべきだ。そのために、①絶えず全体を見回す、②あらゆる手段を使って(お話し、ゼスチャーでも)生徒の注意をひきつけ、鼓舞する、③話の途中で中断し「君、私は何を言った？」などと問い、できなければ同じ質問を他の生徒に回し、クラス全員の注意を促す。作文における誤りは、黒板上で行ない、作文は時にクラスで読み上げ、生徒同士で発見し合い、訂正する。暗記は強制によって萎縮させるよりも練習と実践によって強化されるべきだ(Memoria non vi maceranda, usu et praxi roboranda)。記憶によって頭に刻み込むことは必要だが、それには理論的に学んだことを普段の実践に移し替える支えがあることが好ましい。そうすれば強制なしに準備教材の中身がペンで(書くことで)頭に刻印されるだろう。それでは、その準備教材、そしてその構成はどうであるべきか。

**第14章**では、改訂版『前庭』の、テキスト・辞書・文法の輪郭と適用の範囲が述べられ

る。『前庭』は言語学習の始まりであるから特に厳しい選択がなされ、自然の法則により文でなく、語根から始まる。自然は単純から複合に進むのである。従って、まず最初は、絵の助けを借りて文字が刻みこまれる。続いて語根は、頻度は考慮せず全て提示される、それが言語の基本を形成するからである。ここにおいてラテン語の基本語の森がそびえたつことになる。派生語や複合語はここに出てこない。母語に対応するものがなければ仕方がないが(例:ドイツ語 Woche=ラテン語 Septimania)。テキスト中の言葉は文法と事物の観点から配列される。言葉は事物の観点から、自然の事物の名称の順で、初めは超越的なもの(transcendentia)、そして自然、人為、モラル、そして最後は霊的なもの(spiritualia)へと進む。母語ーラテン語の辞書は、生徒が自ら補助的に作成する。勉強が容易に進み、役に立つとなれば、それは子供に喜びを与える。というのは、それが秩序だっていることと段階を踏み練習を通して学ぶからだ。『前庭』を終了すれば、そのあとは遊び事だ(quod restat, lusus fore)。これから先にはもう目新しいものはなく、喜んで次の『扉』に近づきましょう。(「生徒が自分用の辞書を作る」は絵空事ではない。かつて勤務した日本語学校で、優秀な学生ほど辞書を作っていることを仲間から知らされたことを思い出す。筆者注)

**第15章**では、改訂版『扉』のテキスト、辞書、そして文法の輪郭と用法が述べられる。新『扉』は旧『扉』とは異なり<sup>11</sup>、事物の語彙を全て取り上げることはしないし、言葉の多義性と不規則性から同じ語彙を繰り返しても構わない。新『扉』のテキストは全宇宙の短縮された精髓である、知識と技術のエンサイクロペディアである。旧『扉』のように星、植物 etc. というふうには真のカタログを示すといった些末なことに紛れ込むことはしない。新『扉』は中を一瞥するだけにして、残りは『広間』の方に残すなど、世界の事物を全て照覧するのではない。哲学の不完全性故に、全てが含まれた事物名称は提示しない。また、古典の中の、たとえラテン語名称としては問題がなくても、母語に翻訳できるかどうか疑問なものは含まれていない。ローマとの関係は断ち切り、特別な場合のみ付録か『広間』に回す。旧『扉』は医学と哲学だったが、改めてそこに法学と神学の項目が加わる。これらは同じく人間の知識(scientiae humanae)の蝶番(cardines)で、神学こそはキリスト教の教えの普及に欠かせないものだから。新『扉』のテキストの特徴は、より改善された世界分析(analysis mundi)であり、事物描写を定義の追加や付加形容詞(epitheton)、図絵(Abbild)でさらに明確に分かりやすくしたこと、可能な限り言葉の構成や変化が取り入れられた文法例文集で、語根、構文、プロソディ、表記の連続するパラダイムが示される。文体上の規則は除外し『広間』にまわし、母語への翻訳は生徒の努力に委ねる。辞書については、母語ーラテン語の辞書も生徒の精励に委ねる。文法は、テキストが『前庭』を基盤とするように、『前庭』の文法で触れられた輪郭を完全に詳述するが、それは包括的で正確、かつ真に実用的なものである。それは、規則があたかも論理と事物自体から流れ出る

<sup>11</sup> 改訂版『前庭』『扉』と旧『前庭』『扉』との比較は、鈴木(1960)で行なわれている。



ような、文法的哲学的なもの (*grammaticamque philosophicam, cuius leges e logica fluant, sicuti leges logicae e rebus ipsis*)で、言語の基礎は思考であり、思考の基礎は物自体だから、このようにこれまでとは異なる全く新しい文法が成立した。

**第16章**では、三番目の教科書の目標である優美なラテン語を教え、言語の精神に導く『広間』の輪郭が述べられる。この目標は事物を真に認識することを混乱させる危険があるという批判があるが、人間は認識能力だけではなく、意志を有するのであり、それは強化され、魅力あるものにならなくてはならない。人を魅了する手段に語りがあり、あることを別の光で照らすには人為的語りが要求される。また作者を理解するには、優美な説明と文体の繊細さに常に直面する。こうして言葉が達人になるだけでなく、精神が英知に向けて教育されるのだ (*Accidit, quod cum non tantum Lingua ad eloquentiam, sed imprimis Mens ad sapientiam formanda sit.*)。人間の知性は事物を象徴化する神の叡智を、その模範として有する (*Sapientia autem Dei illustri modo se prodat, nostra potenter se fundet in rerum symbolizationibus*)。神は異なった事物に同じ特徴を刻印したから、それらを区別するのに未知の事物は既知の事物と比較し考察することに慣れなくてはならない。古代ではメタファー、格言、たとえ話、謎々, etc. を用いたが『広間』のテキスト・辞書・文法はそれらも含む。『広間』もまた、テキスト・辞書・文法で構成される。テキストの内容(事物)は『扉』と同一である<sup>12</sup>。

**第17章**では、『前庭』『扉』『広間』を終えた後、完全にラテン語を習得し、真の教育に向けての『最新』と諸作家の作品との調整 (*accomodatio*) が述べられる。生徒はこれまでの準備段階ですでに親しんでいる事物に決められた順序でなくて出会い、また新たな繊細な文体に接し、必要な知識に到達する。読み物は一つだけではすべての人生、全ての事物を含まないから、できるだけ多くし、そこには選択が必要となる。自然と芸術のためには *Plinius*、建築には *Vitruvius*、戦争は *Cäsar*、日常の知識は *Platus* と *Terentius*、文章術は *Cicero*、アジア・ラコニア風文体は *Seneca*、英雄詩は *Virgil*、悲歌は *Ovid*, etc. 作家の作品に関してもテキスト・辞書・規則集が必要である。テキストは作品そのものが選ばれる。辞書は、特殊かつ重要語句解説 (*repertorium catholicum*)、文法は作家の文体の違い(書簡か歴史か詩文か)を扱う。練習の進め方は、①テキストの分析・分解 (*resolvendo*)、②抜書き (*excerpendo*)、③模倣 (*imitendo*)、そのための方法として、a. ラテン語から母語への翻訳 (*versione et reversione Latina*)、b. 作品の書き換え(ラテン語からラテン語へ、言葉・文・段落の順序を変える、同意語におきかえる)、c. 実生活に即した手紙、物語への書き換え (*accomodatione ad praesentem statum rerum suarum vel alienarum*)。文体の模倣練習では異なる作家を同時に選ばない。毎日毎時間行なう。段階別(に) (*gradatio*) に、一節 (*periode*) から二節目、三節目、そして全談話 (*oratio*) へと進む。但し、こうした過程

<sup>12</sup> 松岡(2013),(2016)でかなり詳しく紹介した。

でも言葉より事物への気配りが求められる(*semper cura potior rerum quam verborum*)。

**第18章**は、『最新』が勉学全般に応用できる「ヘブライのトゥリフター」(*Hebraische Trichter*[ド], *Hebraicum infundibulum*)であるとし、(*Trichter*は漏斗の意味で、漏斗で注ぎこむように簡単に知識が入るとのこと。コメニウスはWilhelm Schicardus 考案としている。筆者注)これが言語だけでなく、知識のトゥリフターになると述べる。この章でコメニウスは数多くのラテン語学者、文法家の名をあげ、彼等の願いがこれにより満たされると述べている。最後に、この教授法が勝利した三点(*Tria vero sunt, in quibus plane triumphat methodus haec*)として、

1. 言語と精神を同時に教育する。

*Mentes simul cum lingua erudiendo.*

2. 教え学ぶことから強制を取り除く。

*Violentiam a docendi et discendi actu tollendo.*

3. 全てを生徒たちの絶えず楽しい活動を通して行なう。

*Praxi discentium perpetua et amoena omnia expediendo.*

そして、この教授法は、全ての事物に(*omnibus rebus*)、全ての才能に(*omnibus ingeniis*)、全ての民族・言語に(*omnibus gentibus ac linguis*)適合する。ラテン語が速く、楽しく、着実に(*celeriter, iucunde, solide*)教えられることが明らかであれば、その知識を他の言語にも伝えられるだろう。だが、なぜそれが言語であって、技術(*artes*)や知識(*scientiae*)ではないのか。『最新言語教授法』が応用できることが以下のように箇条書きにされる。

- 1 ラテン語を全民族間に広める
- 2 各民族の言語がラテン語に導かれて幸せに改善される
- 3 ポリグロット(多言語話者社会)を推進する
- 4 事物学習を推進する
- 5 聖書を(*sacram scripturam*)より容易により良くより正しく理解する
- 6 英知を(*prudentialiam*)精神に(*animis*)力強く刻み込む
- 7 全ての学校のよりよき状態(*meliolem scholarum omnium constitutionem*)のために
- 8 教育の状況を(*eruditionis statum*)あるゆる方法で改善する
- 9 未開民族を啓発し(*gentium incultarum culturam*)多くのことで普遍的に一致に達する

この後、**19章**から**27章**にかけて、上に箇条書きされた事柄が詳述される。**19章**はラテン語の普及、**20章**は民族語・母語の教育と普及、**21章**はポリグロット、**22章**は事物の認識と他の教科の学習、**23章**は聖書、**24章**は生活、**25章**は学校、**26章**は教師養成や印刷術、**27章**は民族の教育について、である。そして**28章**から**30章**には、人々・学者・神学者への要望が述べられる。紙数に制約があることもあって、本稿ではすべて省略に付する。

#### 4 結語

コメニウスの『最新言語教育法』の内容を主に11章から17章に絞り、リーゼのドイツ語抄訳をさらに短くまとめ直し、それにハルトマンによる小見出しドイツ語訳を参考に原文から補充するという形で紹介してきた。この作業を通しての本稿の主張は次のようである。それはまず、中等学校のラテン語という語学の教師でもあったコメニウスが、その授業の実践と成功という目標に向かって、考えられる諸前提・諸問題を提示し、それに明確な定義を下しながら、一段一段と足場を固めつつ下から上を目指して歩んだことである。それはまさに語学教師の歩みそのものであり、第18章に至って頂点に達するが、以後の内容は、いわば期待と夢が入り混じった山頂からの眺望である。ただ、そこでも頂上までの経験・知見が適用されるというのがコメニウスの確信・願望ではあったろう。筆者はそれに対し、本稿では特に評価・感想を表明しないが、「一つのことには徹すれば、それは全てに通じる」ことをコメニウスは間違いなく教えてくれる。そして、日本語教師たる筆者が実感し、共感し、そして感動するのは、コメニウスがその一つ＝言語教育を最重要と考え、事物・事実に即して徹底して実践し理論化していったことで、それも細部に至れば至るほど、ああ、そうだったとか、自分もそして仲間も全く同じ体験・発見をしたと思えるところがたくさんある。(今回はそれらにふれる余裕がなかった。)

だが、そうした日常的な営為の報告とまとめが中心に据えられているため、この『最新』を地味なものにし、コメニウスをより高い教育の次元から、さらには哲学・思想の分野から捉えようという立場からは敬遠され、翻訳もされず、一種の日陰の存在へと追いやってきたのかもしれない。

筆者の敬愛してやまぬコメニウス研究の最高峰であったシャラー先生は「コメニウスの著作は二ないしは三のテーマグループに束ねられる。一方は神学・哲学・汎知であり、もう一方は教育・政治であるが、この二つのテーマグループに共通の中間部分(Mitte)があり、ここにコメニウスの教科書作品が位置を占め、二つの領域を結び付ける」<sup>13</sup>と書いておられる。現代のコメニウス研究の大勢はこの中間部分を素通りして一方の方向だけに重点が置かれているようだが、筆者は、いわばその中間点を最高峰と理解し、そこからさらに別の方向を目指すよりも後戻りをし、歩いた道を確認しただけかもしれない。筆者がほそぼそと歩いてきた道ではあるものの、才薄く自覚することが少なかったため、今回の『最新言語教授法』の紹介は、いわば「コメニウスのなかに自分を見出す」旅でもあった。

(了)

---

<sup>13</sup> Schaller(2004),p.13

## 引用文献・参考文献

- Comenius, Joannes Amos(1657,1957) *OPERA DIDACTICA OMNIA TOMUS I (PARS I – II), TOMUS II (PARS III – IV)*. Prag : Academia scientiarum boemoslovenica
- Comenius, Johannes(1649), *Linguarum Methodus Novissima*, Moravus, in Kvačala, Jan(ed.), *Veškeré Spisy Jana Amosa Komenského. Svazek VI*, pp.185-530, Brno, 1911
- Liese, Ernst(1904), *Die neueste Sprachmethode(methodus linguarum novissima)des J.A.Comenius*, Neuwied a.Rh.und Leipzig:Heusers
- Hartmann, Peter u.Käna, Mikoslav(1978), *Johann Amos COMENIUS METHODUS LINGUARUM NOVISSIMA und andere Schriften zur SPRACHLEHRFORSCHUNG*, Archive für Fremdsprachenvermittlung, Konstanz
- Čapková, Dagmar(2007), *OPERA DIDACTICA OMNIA J.A.Komenkého*, Praha-Prerov
- Hofmann, Franz(1959), *J.A.Komenský: Analytische Didaktik*, Berlin
- Korthaase, Werner(2000), *Wichtige Werke von J.A.Comenius in Überblick*, Berlin
- Kvačala, Jan(1914), *J.A.Comenius der Erzieher*, Leipzig
- Schaller, Klaus(2004), *Johann Amos Comenius – Ein pädagogisches Porträt*, Berlin
- コメニウス著:鈴木秀勇訳(1962)『大教授学 I、II』明治図書
- 鈴木秀勇(1960)「コメニウス教授学の方法—その社会史的規定のために—」『一橋大学研究年報社会学研究 3』一橋大学
- 堀内守(1970)『コメニウス研究』福村出版
- 松岡弘(2007)「『鏡』の中の日本語教育—日本語教師のとらえたコメニウスの Methodus Syncritica(類比の方法)—」『日本語と日本語教育・第35号』慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
- 松岡弘(2013)「J.A. コメニウス著『ATRIUM[広間]』の内容と意義—第二言語教育における上級学年用教科書の姿—」『日本語と日本語教育・第41号』慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
- 松岡弘(2014)「J.A. コメニウス原著『Vestibulum[前庭]』について—初級段階・第二言語教科書の構成と変容—」『一橋大学国際教育センター紀要第5号』一橋大学国際教育センター
- 松岡弘(2015)「J.A. コメニウス著『Janua[扉]』の初版・改訂版について—その形態と構成の観点からの考察—」『一橋大学国際教育センター紀要第6号』一橋大学国際教育センター
- 松岡弘(2016)「J.A. コメニウス著『ATRIUM[広間]』の修辞の技法・優美文法に関する考察」『一橋大学国際教育センター紀要第7号』一橋大学国際教育センター

付記:遅まきながらこの機会に、かつての二人の学生、18年前のブタペストの教育図書館でリーゼの著書を見つけてくれた庄司養昌君(一橋大学)と、『最新言語教授法』のフランス語訳の一部を翻訳し、授業で報告してくれた山岡(現・石原)真由さん(慶應義塾大学)に深

J.A.コメニウス著『Linguarum Methodus Novissima  
(最新言語教授法)』に関する一考察

く感謝いたします。

(まつおか ひろし 一橋大学名誉教授)